新刊紹介

後藤雅知・吉田伸之 編
『古文書で読む千葉市の今むかし』
（崙書房出版、二〇一六年）

戸村　紀子

編者である後藤雅知・吉田伸之両氏は、これまでに長年にわたって『千葉市史　通史編』三巻、『千葉市史　資料編』近世一～九、別巻『絵にみる図でよむ千葉市図誌』など多くの市史の編纂事業に関わっている。また、千葉市に残る良質な歴史資料を千葉市民や地域の歴史に関心を寄せる人々に紹介する取り組みが千葉市編纂担当者を中心に行われており、二〇一五年現在で二八号になる『千葉今むかし』（千葉市史編集委員会編集、千葉市教育委員会刊行）を年一回のペースで刊行している。本書は、この雑誌に現在も連載中である「紙上古文書講座」をもとに新稿を加え、後藤雅知・吉田伸之両氏が中心になって加筆・改稿したものである。

刊行の目的は、現在の千葉市域に残された古文書などの歴史資料をテキストとして、これを一つ一つ丁寧に読み解きながら、地域の歴史を知り、学び、考える素材を提供することである。近世の古文書を読むための入門書として編集されたため、「研究ノート」という形式をとっている。まずリード文で取り上げる古文書の内容を示し、史料の写真版を掲載、釈文を載せ、釈文の読み下し、語句解釈、現代語訳と続けたうえで、その史料の背景や史料から読み取ることのできる当時の様子などについての解説を加えている。

本書は、千葉市域の歴史を学ぼうとする人々のためのテキストとして編集されているが、それぞれの古文書から読み取ることのできる解説を載せたことで、近世の歴史を学ぼうとする人だけでなく、「史料を読む」ということはどういうことなのかについて関心を持つ人々にとっても興味深い内容になっている。古文書の写真と現代語訳を眺め、解釈を読むだけでも十分面白い。

例えば「林と牧」の項、「5．牧士とアラビヤ馬伝習御用」では、慶応三（一八六七）年にフランス国王ナポレオン三世から徳川幕府に贈呈されたアラビヤ馬についての話が掲

載されている。同年六月、江戸城大手門外にある下乗橋の外で、贈られた二六疋の受領式が行われた。これらアラビヤ馬は、日本在来種を軍馬に適した馬へ改良するために贈られたもので、幕府はこの馬を直轄の牧場である小金牧（現千葉県）で種馬として放牧することを決定した。フランス側からは、アラビヤ馬飼育のための環境や牧場の管理体制などを確認するため、陸軍教師のシャノワーヌをはじめとする七名のフランス人が事前に小金牧へ派遣された。それを受けて、当時、小金牧を在地で管轄していた綿貫夏右衛門がフランス人一行を迎えるにあたって幕府に提出した「心得方伺い」が、ここに取り上げた古文書である。

短い「伺い」ではあるが、綿貫がフランス人視察団・幕府役人に何をアピールしようとしたか、何が問題だったのかを読み取ることができる。綿貫からの「伺い」は宿・服装・牧士の人数などに関するものであった。視察の際、大人数の牧士を出役させ、乗馬・早乗りなどの技術や放牧していた野馬を集め捕える「野馬捕」を見せることで、フランス側に日本の牧士たちの統率能力や乗馬技術を示すこと。もう一つは馬乗袴を着用することで武士身分としての牧士（普段は百姓であったが、牧場御用を勤める時には武士身分になる）を強調しようとした。ただし、「伺い」についている幕府からの返答書「御附札振」によれば、残念ながら袴着用は認められなかった。また、アラビヤ馬の多くは江戸開城（一八六八年）とともに散逸し、江戸幕府による馬種改良計画も頓挫してしまった。

一枚の古文書「心得方伺い」から、このようにダイナミックな歴史の流れが導き出される。「史料を読む」ということは、単にくずし字を釈文に変換し現代語に訳すだけではない。すなわち、その史料から何が読み取れるのか、あるいは何が読み取れずに疑問として残るのかを考え、その歴史的な意義を検討する過程全体を含む。その作業そのものが歴史研究そのものであり、歴史研究の醍醐味である、と編者は述べる。

なお、本書で取り上げられた史料は次のとおりである。

一．林と牧（生実藩の御林／入会野の開発願い／野馬の捕獲と周辺の村々／鹿狩りと野馬の移動／牧士とアラビヤ馬伝習御用）

二．地域の諸相（陣屋元村の「村」と「法」／星久喜村と川戸村の用水争論／醤油造りと奉公人／抱元‐武家奉公人の周旋業者／旗本建部氏と立退所）

三．湊と交通（寺社参詣の旅と往来手形／荷継をめぐる争い／印旛沼掘割普請と通船／浜野村の河岸／佐倉藩と寒川御蔵）

四．寺と地域社会（妙見寺住職の江戸城年頭御礼／町場化

する境内‐妙見寺門前の土地利用／妙見寺領の年貢取り立てをめぐる争い／千葉町の寺領と海防）

執筆者は、後藤雅知・吉田伸之・芦田信一・今井公子・笹川知美・高見澤美紀・多和田雅保・長坂良宏・遠藤真由美である。

（本学大学院文学研究科史学専攻博士課程前期課程）